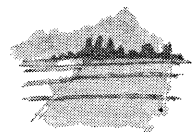


「ペスタロッチ子ども村」の実践運動



鈴木正幸

スイスのチューリッヒから汽車で一時間、セント・ガレンで乗り換えて軽便電車で三十分ほどの地にトローゲンという小さな落ち着いた感じの町につく。この町の郊外の山あいにはペスタロッチ

キンタードルフ（ペスタロッチ子ども村）がある。スイスの誇る偉大なる教育者ペスタロッチにならない、世界の各地より孤児を收容し、生活と教育をともにする新しい教育実践の運動である。筆者は以前よりこの運動に関心をもち文通にて連絡をとっていたのだが、機会があつて、昨秋この村を訪れることができた。ここにこの村の紹介とその実践運動について記してみたい。

一、子ども村の目的と目標

この村の設立の目的について、事務局より発行されている資料

によつてみてみよう。それによると、まず、二つの大きな目的がかかげられている。

一 困窮している子どもを助けること。

二 子ども村は互いに協力する場所であり、国、宗教、言語の境界をこえた相互理解の場である。

さらに具体的には、村に委ねられた子どもたちの生活と保障、精神的・知的発達の保障、つまり子どもらが初等、中等教育の課程と職業的技術を身につけるまでの世話をみることであり。できるならば、子どもらが自国に帰つて、自分たちの必要と性格に合った社会的環境を見い出すことができるのを見とどけるまでがこの村の役割である。つづいて四つの目標を列記すると、

(1) それぞれのハウスに家族的なふんい気を生みだすこと、と同時に子どもらの国の正しい言葉、伝統、文化、宗教を常に

保つようにする。

(2) 他人に対する寛容と尊敬の精神でもって子どもとおとなの共同体をつくること、団結と相互扶助を生み出す積極的な心がまえをもって。

(3) 各国から教育者の永久的な共同研究によって利益をもち、それぞれに国における今日の教育問題の解決に貢献するようすこと。そしてここで得られる成果と教育経験および知識が、それぞれの国における今日の教育問題の解決に貢献するようすに。

(4) 平和に対する真の熱望を自覚せよそれを維持すること。このようなくつかの目的、目標のうちとりわけビル氏が強調されるのは、国際間の相互理解であり、そこから生まれる平和教育であった。元来の目的である孤児を收容し、教育するというそれ自体の活動は、時代の変容にともない意味をかえつつあるといえよう。

二、設立と発展

一九四四年八月に、スイスの月刊誌「J.E.」の編集長のワルター・ロバート、コルティが「困窮児童のための村」というのを提案したのが、この村の設立のきっかけとなった。第二次大戦を中立国スイスにおいて暮した彼は、戦争の破壊によるいろいろな悲劇を目

のあたりにした。とりわけ戦いの犠牲となった子どもたちが彼の注目をひいた。スイスでは第二次大戦中に約二十万人の戦争孤児を各家庭に受け入れていたのだった。コルティはこれらのいたましき子どもたちに、健康的にかつ精神的、知的に健全に成長できる場所を提供しようと提案した。しかもそれは異なった言語・宗教・習慣等を尊重し、個々の子どもたちの個性と素質を十分にのばしうるような場所でなければならぬ。

実現のためにはのりこえるべき幾多の困難に遭遇した。しかし、教育学者のエリザベート・ロトン博士、小児科医のシャロット・カーレイ博士、精神病理学者のマリー・マイエルホフ博士らの協力をえて軌道にのりだすことができた。彼らの提唱にこたえ、スイスの国のあらゆる地方から土地の提供について申し出があつたが、結局昔からの落ちついた町トローゲンの郊外と定められた。ここはチューリッヒから鉄道で約一時間半、海拔九〇〇メートルのところであり、なだらかな山あいにはコンスタンス湖が、西方にはオーストリーの山々が見渡せる景勝地である。トローゲンの町は土地を提供したのみでなく、二千ポンドの基金を寄付した。各地方から寄せられた基金のほかに、スイスの子どもらが強力なバトロントとなった。彼らは自分たちのこずかいを節約して、この村の設立のためにつくしたのだった。また地方当局は材木を提供した。国の内外からも多くの物資が送りとどけられ

た。チューリッヒの建築家ハンス・フィシュリが設計・監督を引きうけ、一九四六年四月に本格的な建設がはじめられた。世界十七ヶ国以上の国から六〇〇人以上の人々がのべ二万五千時間もの労働を提供されたのだった。四七年には六つのハウスがたてられ、フランス、ハンガリヤ、ポーランド、ドイツ、オーストリーなどの子どもたちが住みはじめた。

このようにしてベスタロッチ子ども村は発足したのだった。創始者たちの意図したものは、孤児たちに物質的援助を与えることのみでなく、新しき世代の子どもに平和と相互理解にもとづいたシード(種)をまくための試みであった。戦争の怖なしですませたスイスは、戦争の犠牲にあった子どもたちに、物質的にも精神的にもその最善をつくすべきであると考えた。そしてこの村は、スイスの誇る偉大なる教育者、ハインリッヒベスタロッチの精神をうけつぐものとして、ベスタロッチ子ども村と名付けられた。

子ども村はその後順調に発展していった。一九四八年にはイタリヤ、フィンランド、つづいてギリシャの子どもらが入村した。四九年にはこのハウスが八つの国の子どもたちによってしめられた。そしてこの年、待望の中学校が開校された。五十年には、村が財団法人となり、財政面での根拠をより確かなものとした。さらに五十二年には子ども村後援者連盟が結成された。

一九五六年には、周知のようにハンガリー動乱が勃発した。子ども村は、この動乱による避難者を受け入れることを決めた。翌五七年にハンガリーハウスの建設を開始した。六十年にはチベットの紛争による避難者を受け入れ、つづいて六五年には韓国から子どもたちのための韓国ハウスができた。六六年にはチュニジアからという具合で、子ども村の活動はますます国際性をたかめ、活ばつになってきた。現在では十二ヶ国より二百人以上の子どもらが自国のハウスにおいてのびのびと生活し、教育をうけている。そして近マインドからも子どもたちが入村することである。筆者が訪れたのは、たまたま子ども村の二十年祭の行事の行なわれた後であり、関係者たちの張り切った気持が村全体にみちあふれているようだった。

三、子ども村の施設と組織

子ども村を構成している基本的な単位は、ハウスである。ハウス制度によって成り立っているといえよう。このハウスの仕組みをみてみよう。実際にハウスの一つを訪ねてみよう。アジアハウスの韓国ハウスに入ってみる。建物はスイス特有の山小屋ふうの木造による大きな二階建である。しかし、一步玄関に足をふみ入れてすぐ気がつくのは内部のつくり、装飾すべてに韓国の民族色

が豊かに漂よつてゐることである。その多くが素朴な手づくりの味があり、それがスイスの風土の中にうまく融け合つてゐるのに感嘆させられる。一階には居間、応接室、ハウスベアレンツの居室、バス、トイレ等が配置され、二階に子どもたちの勉強部屋、ベッドルームがある。すべてに明るく清潔な感じである。

このハウスには、十人ほどの韓国の子どもが二人のハウスベアレンツと二人のアシスタント、つまり四人の人びとによつて教育され、生活の面倒を見られている。ハウスベアレンツはもちろん韓国人で、教師の資格をもっていなければならぬ。そしてどの国のハウスベアレンツも結婚しているカップルである。つまり父親と母親の役割が重要視されているのである。この夫婦の実際の子どもたちもほかの子どもと同じように生活している。兄弟とかたちである。韓国ハウスのアシスタントはスイスの若き女性であった。たまたまハウスの乾燥室で、子どもたちの洗濯物をせつせと干している光景に出ぐわした。このようなハウスが、なだらかな緑の丘にいくつも点在している。

ハウスの建物のほかに共通に使われている施設として、第一にコミュニティホールがあげられる。これは村の全員が一堂に会する場所である。記念行事等の催しのほか、毎週月曜日の朝には三百人ほどの村の構成員が朝会のために集まる。これはまた体育館の役割もかねている。この建物には音楽室、絵画室、工作室など

が付設されている。コミュニティホールのほかに中学校の校舎がある。この教室は日本でみられるものと大差ないが、その隣りに並んでいるいくつかの作業室はなかなか立派である。この村では子どもたちが、将来独立できるようにと職業教育が非常に重要視されている。

図書室には各国の絵本や物語りが集められていて興味深い。日本の本も少しはあったが、いさか時代の古いものばかりであった。現代の日本の印刷、製本技術でもつて、日本の今日の姿を示す本がぜひともほしいと痛感させられた。

村共同のキッチンはとりわけこの村の自慢のようであった。かなり大きな建物で近代的な設備がととのえられているようであった。特徴的なのは、いろいろな国の人々のためにその国の民族料理ができるように考えられている点である。

このような建物のほかに、共同使用の教会、ユースホステル、それに牛舎がある。それぞれ大きな建物で、立派な設備をもつている。牛舎についていえば七頭の乳牛のための部屋、採乳室、殺菌装置室、それに農具室のついたもので一昨年建てられたばかりである。牛をたくさん飼つてこの村に放し飼にするのが、子どもたちの前からの願いであったという。牛たちは首にグログロツケンという大きなスズがつけられ、カランカランと音をひびかせて思い思いに歩き回っており、のどかな田園風景をかもし出して

いる。ここでとれる牛乳が村に供給されるという利点と同時に酪農実習という教育的な役割もある。このほか運動場、プールなどもあり、生活・教育環境として申し分のない施設となっている。

この村の教育について概観しよう。子どもたちは、原則として小学校までは各自のハウスで教育がおこなわれる。幼児教育、初等教育はハウスベアレンツの手で、母国語でなされる。ここにおいては、生活、教育ともども自国において行なわれるのと同じように配慮されている。子どもたちが将来国に帰って社会人となる時のために。しかし、小学校教育のうちでも高学年になると、午後の時間に各ハウスから集まるインターナショナルのクラスにいき、音楽、図工、体育の授業をうける。筆者はたまたま絵画の授業がなされている教室を見ることができた。フランス、ドイツの子どもたちにまじって韓国、チベット、ベトナムの子どもたち皆で七、八人が、イタリア人の若い教師とともににぎやかで楽しげに授業がすすめられていた。ここではドイツ語で授業がおこなわれる。つまり小学校から外国語としてドイツ語がつかわれるのである。外国語は教わるというよりは使われることによって子どもたちは急速に上達するという。

小学校の最後の学年の第六学級に達すると子どもたちは六ヶ月の観察クラスに入る。そして個々の子どもにとって将来の教育はどうあるべきかが観察、決定される。能力のある子どもは大学に

進む道もひらけている。また望まれるならば、その子どもの国の視学官がやってきて最終判断のテストに加わることもできるのである。中学校はもちろん学年別編成である。各ハウスの子どもたちが一堂に会してインターナショナルのクラスとなる。この村の公用語であるドイツ語でおこなわれる。筆者の訪れた韓国ハウスの中学校の子どもも、実際にはきはきとドイツ語で受け応えるのには感嘆した。中学校の教育では職業教育にかなりのウェイトがおかれている。男子のために木工の作業室小さいながら機械室、女子には裁縫室、料理実習室がありそれぞれ立派な施設となっている。実際に役に立つ技術を子どもらの身につけさせねばならないのである。子どもたちがこの村を卒業して、社会に出る時、自らの生活をなしとげるよう、それを見とどけるまでがこの村の責任であるといわれていた。

この村の卒業生の多くは将来職人として身を立てるため、親方のところで徒弟生活をしているものが多い。しかしこれらの子どもたちは、休みといえどもクリスマスといえども帰る家を持っているわけではない。かれらは育ったところのベスタロッツ子ども村に帰るのである。そのための施設としてこの村にユースホステルが建てられたのである。最初は出身のハウスに帰っていたが、卒業生が多くなるにつれハウスでは狭くなってきた。ユースホステルに筆者も訪れたが、谷あいを見下ろす絶景の地にあり、子ども

らがふるさとに帰ったというふんい気をつくりだすための細かい配慮がなされていた。

最後にこの村の宗教について簡単にふれよう。ヨーロッパにおいては、キリスト教が（大きくカソリックとプロテスタントに別れて）その宗教の戒律にもとづいて根づよく生活に浸透している。キリスト教徒に加えて仏教徒、回教徒が入り交って、子ども村を構成しているのであるからたいへんであらうと思われた。しかし筆者の心配に反して、実はたいへんスムーズにこの問題は解決されていた。この村では宗教的な行事は、すべて各民族の伝統と習慣が重じられている。各宗派に全て共通に使用される教会が特徴的である。スイスの一婦人の寄金、約二十万円で最近建てられたものである。抽象的なデザインをもった教会で、中央に祭壇を置いたきりのシンプルなものである。東に面した窓の一つは特別のもので回教徒がメッカのカーバ宮殿の方向に通じるものであると説明をうけた。各国のハウスの大きな宗教的な行事には、なるべく村全体が参加し、国際理解の場に行っているとのことである。この教会において、すでに村出身の若者が何組も結婚式を挙げたとのことであった。

四、今後の課題

秘書のギム女史の案内により村をていねいに見学した後、この村の村長ともいべき責任者のビル氏から一時間以上にわたって話をうかがう機会を得た。氏は一度来日されたこともある親日家で、物腰の柔かい温厚な紳士であった。すでに十年以上この村の指導者として発展につくしてこられたのである。これまでの苦労、問題などいろいろと話された。とりわけ財政上の問題は、村が発展するにつれ今後の大きな問題である。しかし氏が強調されるのは、このような実践運動を通じての国際理解による平和教育なのであった。同じ運動が世界各地におきることにより、戦争のない真に平和な世界をつくり出すことの一助となれば、それ以上の望みはないのであると。氏は日本の経済面の進歩、文化、教育の水準を高く評価されたあと、ぜひともベスタロッチ子ども村（キンダードルフ）を日本につくってほしい、これまでの経験から得た全てを提供するからと熱烈に要請されるのだった。ベトナムの戦争孤児がはるかはなれたスイスの地で、元気に生活している現実を目のあたりにして、ビル氏のこの提案はわれわれアジア人に対する鋭い詰問のように思われた。

筆者は、ビル氏を中心とするこのベスタロッチキンダードルフの運動は、現代に生きぬくヒューマニズムの運動として高く評価したいのである。